

## 戦争時代について

山崎 愛子（昭和5年生まれ）

昭和五年三月四日、長野県小谷村生まれ。当時、お菓子の配給は十五歳まで、国民学校の卒業式の歌は愛国行進曲でした。「見よ、東海の空明けて」と戦後の人は知らないと思います。同級生の三分の二位が産業戦士という名のもと軍事工場に派遣されました。私も昭和十九年四月一日、東京都品川区東品川の松下電機に入社しました。入社式では松下幸之助さんの挨拶がありました。

その年の六月、初めて敵の飛行機を見ました。前から来ていたそうです。翌年、昭和二十年の初め頃でしょうか、住宅の強制移動が始まりました。空襲による延焼を食い止めるために数メートルごとに二、三軒の家が壊され、私達もその片付けに行きました。

毎日、焼夷弾がパラパラと落とされるようになりました。私は送信機や受信機の組み立てをしていましたが、下請工場が爆弾でやられてしまうと部品が欠品し、製品になりませんでした。工場では私達は皆、日の丸に神風と書いたハチマキをして仕事をしていました。警戒警報というのに、職場の中では皆を集めて歌を教えているのです。

吹けよ吹け吹け メリケン嵐  
なんの<sup>そ</sup>反れ玉 迷い玉  
大和島根は揺るがぬ島根  
吹けよ神風 敵を<sup>の</sup>呑む敵を呑む  
エイエイエイ

毎日毎日、警戒警報と空襲が続き、特に昼食・夕食の時間はひどかったです。夜は部屋になど寝ていられません。防空壕の中です。無線機工場なので防空壕の中には無線機が取り付けられおり、敵の飛行機がどの方面に爆弾や焼夷弾を落としているか状況を知ることができたので、私はいつも防空壕の外に出て、その方向を見ていました。焼夷弾が落とされると、その下は火です。火の海がずっと続きます。焼け出された人達が私達の工場のグラウンドに逃げてきました。高射砲でどんなに迎え撃っても敵の飛行機には届きませんでした。

東品川は東京湾のすぐそばでした。隣の軍事工場に爆弾が落とされた時は、道を隔てた私たちの工場の壁にひびが入りました。私達の会社の屋根には電波妨害のスズ（箔）が落され、敵はどうしてこんなに的確に落とすことができるのか本当に不思議でした。

八月に入って間近、B29が頭上をよぎり東京湾に出るとすぐ、日本の小さな飛行機が来てB29の横に体当たりし、まっすぐ海に沈みました。敵の飛行機はパタパタと落ちていき、操縦者がパラシュートで海岸にヒラヒラと降りました。

両親を亡くした子供たちはボロボロの服を着て裸足でした。田舎からリュックを背負った人が来ると、食べ物が欲しくて大勢の子供達が手を伸ばしていました。それを見ている私達は、何もしてあげられなくて涙が出ました。東京の小学生は皆、田舎に疎開していましたから、終戦になって帰る家のない子供達がいっぱいたと思います。東京はコンクリートの建物が焼け残っただ

けの、一面の焼け野原でした。

終戦後の八月十七日だと思います。勝利した米軍のB29が編隊へんたいを組んで靖国神社や明治神宮を回って行きました。八月二十八日、帰郷ききょうの前、敵に技術を盗まれないように完成していた製品を防空壕に捨て火をつけ、土をかぶせて始末しまつしました。寮生皆で品川から皇居まで歩いて行くと、そこには兵隊さんがいっぱい来ていました。皆、大声をあげて「天皇陛下へいがか、万歳ばんざい」と両手を上げ、涙を流していました。私は負けたのに万歳をしている姿を見て何とも言えない気持でした。私はそっと石をひとつ拾ってきました。

両親を亡くした子供達はその後どうしたかと、今でも時々思い出しています。